フッサールのノエマとインガルデンの純粋志向的対象

志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ

植村 玄輝*

本稿の目的は、インガルデンの立場の検討がフッサール研究に対して持つ意義を示すことである。フッサールの超越論的観念論をインガルデンの形而上学的実在論と付き合わせて詳細に検討することは、多くの洞察をわれわれにもたらす。われわれはこのことを、志向性理論の問題を例にして示したい。したがって、本稿で行われる作業は、両者の対立のポイントを体系的観点から浮き彫りにするというものである。だが、歴史的事実としての対立をより実証的に明らかにするというそれはそれで重要かつ興味深い課題にとっても、本稿は最初の見積りとして役立つだろう。

われわれは以下の手順で議論を進める。まず、志向性理論の課題を確認した上で、『イデーンⅠ』における超越論的観念論の大枠を素描し、この立場は積極的にはどう定式化されるのかという問題を導入する(1)。次に、インガルデンの理論を参照し、『イデーンⅠ』の志向性理論の中核をなすノエマ論を、精緻化しながら解釈する(2)。これらを踏まえることによって、『イデーンⅠ』の観念論的主張が、様相に関する(準)形而上学的な立場であることが明らかにされる(3)。そして最後に、フッサールとインガルデンの対立がそう簡単に決着のつく問題ではないということを、ごく簡単に論じる(4)。

1 志向性理論としてのフッサールの超越論的観念論

現象学的な志向性理論の創始者であるブレンターノが、志向性を対象への関係として特徴づけたことはよく知られている[1]。ある判断を下すとき、われわれの判断はつねに何かについての判断である。だが、こうした一見すると自明な直観を額面通りに受け止め、判断作用の存在が〈それについて判断がなされる何か〉の存在を含意することを認めてしまうと、われわれは厄介な問題に巻き込まれてしまう。判断作用一般に「対象への関係」が額面通りに成り立つとしよう。その場合、フロギストンについての判断作用が存在するならば、判断されたものとしてのフロギストン、つまり判断作用が関係する志向的対象としてのそれが存在する。だが、われわれの意識を超越した対象からなるこの世界のどこにもフロギストンは存在しない。するとわれわれは、存在しないものが存在するという帰結を認めなければならないように見える。これはどう理解されるべきなのか。

実際には存在しないものについての判断も可能であるということは、われわれの概念的能力にとって本質的である。しかも、われわれが例として挙げたフロギストンのように、

* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学・倫理学専攻(哲学分野)後期博士課程。sachverhalt@gmail.com

[1] 『経験的立場からの心理学』の有名な一節(Brenrano [1874/1924: 124])を参照のこと。この一節に始まるブレンターノ自身の志向性理論の諸相については、Chrudzimski [2001]が包括的に論じている。また、同書をはじめとしたフルヅィムスキによる一連の重要な仕事に、志向性理論全般に関するわれわれの議論が多くを負っているということを、ここで付け加えておきたい。

存在しないものについての(偽の)判断は、学問的な認識にかかわるすぐれて合理的な文脈において現になされてきた。判断の志向性についてのこうした問題は、些末なものではなく、志向性理論の主要な部分に位置づけられる必要がある。存在しないものが存在するという帰結が志向性についてのある観念から出てくるように見えることは、無視できない。

この帰結は、「存在」の意味が一つしかないならば矛盾でしかない。すると、フロギストンを例にした考察から得られるべき結論は、それが仮定する次の三つのうち、少なくとも一つが否定されるということである。つまり、(i)志向性は額面通りのいみで「対象への関係」を特徴として持つ、(ii) 志向的対象は(場合によっては存在しない)超越的対象と同一である、(iii)存在は一義的である、の三つである[2]。

さて、フッサールの志向性理論の発展は、(i)を拒否して志向性の関係性を見かけ上のものとみなす『論理学研究』(『論研』)の立場から、「ノエシスとノエマという、志向性の本質的な二側面性」(III/1: 296)を認め、すべての作用に志向的対象への関係を帰属させる『イデーンⅠ』の立場へ、というふうに要約できる[3]。だが、この立場変更の行き着く先は(ii)の否定ではない。たしかに、対象を志向的なものと超越的なものに二重化すれば、すべての作用に志向的対象への関係を帰属させ(i)を認めつつも、超越的対象が存在しない事例を、(iii)を保持したまま扱うことができる[4]。しかし、こうした対象の二重化は、フッサールによって繰り返し批判されている(cf. III/1: 89–91, 206–9, 297–8n; XIX/1: 436–40; XXII: 343–4; XXVI: 40–8; XXXVI: 13, 39, 66–7, 106–7)[5]。フッサールの意図に忠実になるならば、ノエマは超越的対象と数的に別のものとして解釈されてはならない。

では、『イデーンⅠ』のフッサールは、(iii)を否定して存在概念を二重化しているのだろうか。その場合、「存在しないものが存在する」が意味するのは、存在しないものが(この

---

[2] より正確には、仮定はもう二つある。つまり、(iv)存在しないものについての志向性が可能であるという仮定と、(v)関係の成立はその関係項の存在を含意するという仮定である。だが、(iv)は志向性にとって本質的な特徴であり、これを否定することは志向性理論の課題の放棄に等しいだろう。そして、(v)を否定して関係についての基本的な原理を改訂することは、関係とは何かということを不明瞭にする、あまりにもアドホックな対処法である(cf. Thomasson [1999: 79])。

[3] 『論研』の立場については、Chrudzimski [2001: 210–7; 2002: 191–3]が詳しく論じている。この理論の定式化とそれが『イデーンⅠ』の立場に取って代わられる過程については、われわれも別の機会に論じた(植村[2007])。なお、われわれは本稿でノエマを対象と見なす対象論的解釈の正しさを前提するが、こうした解釈はもちろん唯一のものではない。Føllesdal [1969]を起点とした、ノエマを媒介者として解釈するという路線も存在する。こうした媒介論的解釈を直接的に検討する余裕は本稿にはないが、対象論的解釈にもとづいたわれわれの考察が全体として正しいフッサール像を描いているのだとしたら、本稿は媒介論的解釈の間接的な批判となるだろう。媒介論的解釈に対する直接的かつ包括的な批判としては、Drummond [1990: ch 4]を参照されたい。(ここで付け加えておけば、対象論的なノエマ解釈は一枚岩の立場ではない(cf. Drummond [1990: ch. 3])。だが、われわれの解釈がこの解釈の内部でどう位置づけられるかについての考察も、本稿の課題を超えている。)

[4] この立場は、『表象の内容と対象』のトヴァルドフスキにしばしば帰せられるが、これは誤った解釈である。第一に、同書のトヴァルドフスキは存在の一義性を保持しない。何かが対象である(対象として存在する)ことにとってそれが存在することは非本質的であると主張することで、トヴァルドフスキは(iii)も否定しているのである(cf. Twardowski [1894: §§ 5, 7])。第二に、同書では、(場合によっては存在しない)超越的対象の水準は、その背後に(カントの物自体のような)「原因」を想定できるようなものとして考えられている(cf. Twardowski [1894: 35–6])。つまりトヴァルドフスキの場合、対象概念は、志向的対象(「内容」)・超越的対象・超越的対象の「原因」に三重化されている。

[5] この批判の正否という問題に、われわれは最後に簡単に立ち戻ることになる。

「存在」とは別のいみで)ソンザイするということになり、問題の帰結に矛盾はないことになる。こうした立場は、それを突き詰めたフッサールの兄弟子にちなんで「マイノング主義」と呼ばれる。では、フッサールはマイノング主義者なのか。話はそう単純ではない。

マイノングによれば、「諸々の対象は、把握されようがされまいが、そうであるがままである」(Meinong [1915: 244]; cf. Chrudzimski [2007: ix])。だが、『イデーンⅠ』のフッサールは、まさにこうした考えとは真逆の立場に立っている。「世界それ自身は、その存在全体を何らかの『意味 Sinn』として持ち、この意味は、意味を与える領野としての意識を前提している」(III/1: 120–1)。ノエマは「意味」とも呼ばれていたのだから(cf. III/1: 203, 207 *et passim*)、この一節で表明されているのは、超越的対象の存在は(超越論的)意識[6]に依存しているという主張に他ならない。

この主張から、フッサールが「存在」の意味をマイノング的に二重化しているわけではない、という帰結が引き出される。ありとあらゆる対象は意識に依存して存在するという主張が正しいとすれば、「意識から独立した対象は存在しない」という言明は真である。しかしマイノングによれば、「そのような対象は存在しない、ということがそれについて妥当するような対象が存在する」(Meinong [1904: 490])[7]。すると、もしフッサールがマイノング主義者ならば、意識から独立した対象の存在を否定できても、そういった対象の独立的ソンザイは認めざるを得なくなる。だが、こうした解釈の言質をフッサールのテクストから取ってくることはおそらく不可能だろう。フッサールをマイノング主義者と見なす積極的な理由はない[8]。

では、フッサールの超越論的観念論は積極的にはどのような主張なのか。すべての作用に対象への関係を認める一方で、フッサールは対象の二重化もマイノング主義も採用しない。そうだとすると、「存在しない対象」の問題はどのように解決されるのか。

ここでわれわれは、『論研』のフッサールが、存在を真理と深く関連づけていたことを思い出そう。「〔何か〕が存在し、かくかくと規定されているということ、まさにこのことは、存在自体の必然的相関者をなす真理自体である」(XVIII: 231)。たしかに、ここでの対応説的な言い方は実在論的な色彩を帯びている[9]。そのため、この一節は後にまで維持されるフ

---

[6] とくに断りのないかぎり、以下に登場する「意識」は「超越論的意識」の略である。

[7] この――「逆説的な言い方が好きな人なら、こう述べることがおそらくできるだろう」との但し書き付きの――発言だけを取り上げると法外な主張にしか見えないが、マイノング主義は即座に拒否できる立場ではまったくなく、むしろ真剣な検討に値する(cf. Chrudzimski [2007])。

[8] マイノングは対象一般についての自らの理論を「対象論」と呼ぶが、それは、対象一般が存在を超え出ている außerseiend ためである(cf. Meinong [1904: 517-20])。すると、『イデーンⅠ』で「(形式的)存在論」という用語を導入する際にマイノングの対象論がわざわざ引き合いに出されるという事実も、フッサールがマイノング主義者ではないことの傍証と見なされるだろう(cf. III/1: 28n)。

[9] インガルデンが『論研』を実在論的著作として解釈する際に論拠にするのは、ここで表明されているように見える対応説的な真理観である（cf. Ingarden [1975: 5–7]）。これはわれわれの議論にとっても重要な論点であるのだが、ここでは以下の二点を指摘するにとどめる。

1. インガルデンの『論研』解釈は、少なくとも次の二点に関して正しくない。第一に、『論研』のフッサールにとって、対応説的な真理概念は派生的なものである(cf. 植村[2007: 175–7])。第二に、『論研』のフッサールは、実在論的というよりも形而上学的に中立的な現象学を標榜している(cf. Zahavi [1992]; 植村[2009a])。だがここで注目したいのは、インガルデンの実在論的な『論研』解釈の根拠が、他の論者による同様の解釈と異なるという点である。実在論的な『論研』解釈の多くは、志向的対象

ッサールの立場を表明していないかもしれない。だが、この一節に現われている主張の核、存在は真理と相関するという考えは、『イデーンⅠ』第四編第二章冒頭の次の重要な一文にも反映されている。「原理的には、論理的領分つまり言表の領分において、『真に存在する』ないし『現実に存在する〔現実的である〕』と『理性的に証示可能である』は相関している」(III/1: 314; cf. 329)。ここでの「理性的証示」とは、明証的な判断作用のことである(cf. III/1: 316–7)。そして「明証は〔…〕真理の体験に他ならない」(XVIII: 192)のだから、フッサールは存在を、真理に与る体験としての明証的判断作用(正確には、可能な明証的判断作用)の志向的対象(ノエマ)と見なすのである。

真理と存在の相関は、『イデーンⅠ』でも保持されている。だが、その際に『論研』には見当たらない主張が付け加えられていることにも注目しよう。『イデーンⅠ』において真理と相関すると見なされているのは、端的な存在ではなく、「真の」あるいは「現実の」存在である。フッサールの超越論的観念論を存在概念のマイノング的二重化から分け隔てる積極的見解は、こうした言い方の背後に隠れている。だがそれを明らかにするためには、フッサールのノエマ論の細部に立ち入らなければならない。

2 インガルデンを参照してノエマ論を精緻化する

ノエマは多様な構成要素からなり、それらすべてを含んだ構造を持つものとして捉えられた完全体が「まったきノエマ」と呼ばれる。このことに気付くためには『イデーンⅠ』の後半を一読するだけでおそらく十分だろう。だが、それらの構成要素が相互にどう関係するのかは、それほど明らかではない。われわれは以下でノエマに関する『イデーンⅠ』の見解をすこし詳しく見ていくが、その際に、対応するインガルデンの主張を手掛かりにする。というのも、「インガルデンは、フッサールの後期［＝『イデーンⅠ』以降］の理論を受け継ぎつつも、それを存在論的により正確なやり方で仕上げようとしたのである」

と超越的対象を同一視する第五研究の議論を拠り所にしているのである(この解釈の具体例については、Zahavi [1992: 117]を参照のこと)。後でも触れるように、インガルデンの実在論は、二つの対象の同一視の拒否、つまり「超越ないし世界への直接的な通路を実現するものとして志向性」という考えの拒否と深く関係している。世界との直接的な対面としての端的な知覚に、インガルデンは志向性を認めないのである(cf. Ingarden [1964/65: vol. II, 175–6])。(とはいえ、インガルデンの知覚論には、感覚与件の位置づけに関する不明瞭さという難しい問題が存在する(cf. Chrudzimski [1998: ch. 6])。)インガルデンの実在論的見解を反映しているのは、志向性によってわれわれは超越的対象に直接対面しているという直接実在論的な志向性理論ではなく、真理の対応説なのである。

2. では、インガルデンが対応説的な真理観を保持できた哲学的背景は何なのだろうか。このことは問われてしかるべきだろう。この問題については、Chrudzimski [2008]がタルスキとの関連を指摘する興味深い考察を与えている。(充実に関するフッサールの議論の変形として、インガルデンはタルスキの真理論に言及している(cf. Ingarden [1962: 157n])。)だが、インガルデンの真理観の歴史的起源が問題になる場合、フルヴィムスキが挙げるマイノングからの影響だけでなく、ミュンヘン・ゲッチンゲン学派における対応説的な真理論(とりわけ Pfänder [1963/2000: 80]と Reinach [1911; 1913: 224–5])からのより直接的な影響も考慮する必要があるだろう。インガルデン自身、真理論の文脈でプフェンダーにしばしば言及し(cf. Ingarden [1925: 128; 1931: 172n; 1962: 153n])、真なる否定的判断の対応者として自立的な対象の水準に否定的事態を認めるべきかという問題に取り組む際には、これを認めるライナッハの立場を批判的に検討している(cf. Ingarden [1964/65: vol. II/1, §53])。

以上の二点は、実在論的現象学の積極的な描像を得るための重要な鍵であるように思われる。われわれは別の論考(植村[20**])で、ライナッハを中心にこれについて詳しく論じるつもりである。

(Chrudzimski [1998: 105])。

フッサールはまったきノエマを、ノエマ的意味(ノエマ核)と定立的諸性格という二つの層からなるものと考えている(cf. III/1: 206 *et passim*)。この区別の根拠は、われわれが(同じ仕方で把握された)同一の対象にさまざまな様態において関係しうることに求められる。われわれは、バラとして把握されたこの同じ花を実際に知覚することも想起することもできる。したがって、あるノエマがバラであるという仕方で把握されたものである(つまり、バラであるというノエマ的意味を備えている)ということだけでは、そのノエマが知覚作用と想起作用のいずれに相関するのかは区別されない。ある作用に相関するまったきノエマを個別化するためには、ノエマ的意味だけでは不十分なのである。そうした個別化を可能にするものとして、相関する作用の様態の対応者としての定立的諸性格も、ノエマの構成要素として認められなければならない。

これで終わりではない。フッサールは、ノエマ的意味を記述する表現(「ざらざらしている」など)と定立的諸性格を記述する表現(「知覚的に与えられている」など)を区別し、それぞれの記述が別の次元に属すると述べている(cf. III/1: 300)。ところで、明証的な判断作用とそうでない判断作用は、同一の意味を内容として持ちうる(cf. III/1: 218)。そして、ある判断作用が明証的であることを、フッサールはその作用の遂行様態の一種と見なしている(cf. III/1, 315–6)。これらから次のことが帰結する。(可能な)明証的判断作用に相関するノエマが現実的であると述べられるとき、そのノエマは現実性を定立的性格の一種として含み持ち、現実性は、そのノエマのノエマ的意味とは別の次元に属する。この主張こそ、『イデーンⅠ』の超越論的観念論の正確な理解のための重要な鍵である。だが、ノエマの内部に二つの次元があるということで、何が考えられているだろうか。

インガルデンの理論を参照することは、ここで役に立つ。インガルデンによれば、ノエマ(「純粋志向的対象」)は、「志向的構造」とその「内実 Gehalt」が備える構造という二つの側面を持つ(cf. Ingarden [1931: 123–6; 1964/65: vol. II/1, 216])。ある純粋志向的対象の志向的構造とは、その純粋志向的対象が何らかの性質を担うことで成り立つ構造のことである。これに対して、純粋志向的対象の内実の構造は、純粋志向的対象の構成要素である特別な担い手が、何らかの性質を特別な仕方で担うことで成り立つ。

こうした立場の内実とそれを採用するポイントは、不可能な内容を持つ作用とその相関者について考えると分かりやすい。太郎が正十面体のサイコロを欲しがっているとしよう。純粋志向的対象が何であるか(つまり、その内実)は相関する作用の内容(「非直観的内容」)と完全に一致するのだから(cf. Ingarden [1925: 127; 1964/65: vol. II/1, 219–20])、欲するという太郎の作用に相関する純粋志向的対象は、正十面体のサイコロである。「正十面体のサイコロ」が問題の純粋志向的対象を正しく記述するものである以上、正多面体であるという性質や十面体であるという性質は、〈欲するという太郎の作用と相関している〉という関係的性質とともに、その純粋志向的対象に何らかの仕方で含まれているように思われる。だが、正多面体性と十面体性は、どんな対象もそれらを同時に例化することはできないと通常考えられるかぎりで、不可能な性質の組をなしている。純粋志向的対象そのものは、この通常のいみで正十面体であるわけではない。したがって、もし問題の志向的対象に正多面体性と十面体性が例化されているのだとしたら、その性質例化は、不可能性を許容する

特別なものでなければならない[10]。純粋志向的対象には、性質に関するどんな不合理も許容する、内実という側面が存在するのである(cf. Ingarden [1931, 129])。それに対して、〈何らかの作用と相関する〉という関係的性質を持つと同時に持たない純粋志向的対象は存在しえないのだから、ここでの性質例化は不可能性を許容しない。こうして純粋志向的対象の内部において、〈通常の例化によって説明される志向的構造〉と〈特別な例化によって説明される内実の構造〉という二つの側面が区別される。

以上の考えは、『イデーンⅠ』における次の三つの主張を明確にしてくれる。すなわち、(a)ノエマ的意味の記述に際して意味の変様が生じているという主張(cf. III/1, 205–6, 300)、(b)「(規定可能な)X」はノエマ的意味に属するという主張(cf. III/1: 299, 303)、(c)ノエマは燃えないという主張(cf. III/1: 205)である。順番に確認しよう。

(a)ここでの「変様」は、ノエマ的意味が諸々の規定性(諸述語)を持つ仕方が不可能性を許容する特殊なものであることを示している。すべての述定的作用にノエマが相関する以上、「妥当な述定一般の可能性の条件は、対象一般の可能性の条件である」(XXVI: 161)。だが、丸い四角や正十面体についての述定も可能なのだから、この水準では「ありとあらゆるものが、意味するという仕方によって、対象的に、つまり志向的対象 Objekt になりうる」(XIX/1: 322, 第二版から引用)[11]。したがってここで問題になるのは、不可能な性質例化を許容するような対象の可能性の条件である。

(b)ノエマ的意味の記述において性質や関係が帰属させられるのは、まったきノエマではない。というのも、まったきノエマが性質を例化する仕方は、不可能性を許容しないのである。したがって、ノエマは二側面性を持つ。ノエマ的意味の規定性の担い手はまったきノエマとは区別される X であり、X が担うのはこうした規定性に限られる。

(c)まったきノエマが通常の仕方で担う性質は、ごく特別な種類のものに限られる。フッサールによれば、現実に存在する超越的対象とは、(可能な)明証的判断作用に相関するまったき判断ノエマのことであった。この場合、超越的対象がそれ自体で持っているとされる性質は、まったきノエマのノエマ的意味の内部に位置づけられ、相関する判断作用の内容に依存したものと考えられる[12]。したがって、われわれがふつう超越的対象に帰属させるような実質的な事象内容を持つ性質はどれも、超越論的現象学的な観点からは、ノエマ的意味の構成要素である X によって特別な仕方で担われている。まったきノエマにそうした性質を述定することは、カテゴリー・ミステイクなのである。まったきノエマは燃えない。だがそれは、氷の塊が燃えないのとはまったく別の根拠から燃えないのである。われわれがまったきノエマに述定できるのは、「これこれの判断に相関している」や、「これこれの様態である」といった特殊な性質に限られる。

---

[10] インガルデンとは異なる、この条件的主張の前件を認めない立場ももちろん可能である。Thomasson [1999: 105–11]は、インガルデン的な志向的対象を導入することで虚構対象の存在を認めるが、虚構対象の内実についての言明に関しては、接頭辞 prefix を用いてパラフレーズする手法を採用している。

[11] つまり、対象一般の可能性の条件は、『論研』第四研究において論じられた純粋(論理)文法によって明らかにされるのである。この点の詳細については、植村[2009b]で論じた。

[12] 前節で引いた一節をここでも引用しておこう。「世界それ自身は、その存在全体を何らかの意味として持ち、この意味は、意味を与える領野としての意識を前提する」(III/1: 120–1)。

3 フッサールの超越論的観念論とは何か――(準)形而上学的観点から

われわれの目的にとってはこれで十分である。元の問題に戻ろう。フッサールの超越論的観念論がマイノング主義でないのだとしたら、それは積極的には何なのか。われわれの現時点での答えはこうである。フッサールの観念論は、様相に関する(準)形而上学的主張なのだが、既成の立場のどれに属するとも言いがたい(敢えて言えば、それは極端な様相実在論の亜種である)。これまでの成果を踏まえ、この解釈に根拠を与えよう。

『イデーンⅠ』のフッサールによれば、意識は絶対的な存在者である(cf. III/1: 105 *et passim*)。ところで、意識に属するあらゆる可能な作用にはノエマが相関するのだから、絶対的に存在する意識の全体とノエマの全体との間に成り立つ普遍的な相関関係の分析では、あらゆるノエマが等しく存在すると見なされる。こうした分析の水準では、現実的・可能的・不可能的という定立的性格を持つノエマのいずれにも優位は与えられない。そしてフッサールによれば、この水準での分析は、現実と理性的証示可能性の相関についての分析(「理性の現象学」)に先行する(cf. III/1: 337)。現実は、可能なものの総体の一部として特徴づけられ、そのかぎりでそれ自体ある種の可能性なのである。

これによって、フッサールはマイノングとは違い、存在の一義性を保持しているということが確認できる。存在しているのは意識とノエマの相関の全体であり、ノエマが現実的であるかどうかは、存在様態の違いでしかない[13]。したがって、絶対的存在者としての意識とその相関者を考察するという観点――超越論的現象学的観点――からは、現実的であるかないかというノエマの存在様態の違いは、一方と他方のノエマのどちらかだけが存在するといった違いを生み出さないのである。別の言い方をすれば、フッサールの超越論的意識とは、現実世界も含めあらゆる可能世界や不可能世界の総体をその相関者として持つ絶対的存在者であり、それらの(不)可能世界は存在に関して同等である[14]。

インガルデンの理論をさらに参照しつつ、こうした路線の解釈の細部を詰めるという作業は、きわめて愉しく興味深いものになるだろう。しかしここでは、いささか大局的な観点からの所見を二点述べることしかできない。

I.『イデーンⅠ』のフッサールの見解は、「われわれの世界は多くの世界のうちの一つでしかない」(Lewis [1986: 2])という様相実在論の一種と見なせるかもしれない。だが、出来合いの立場との性急な同一視や類比は危険である。たとえば、ここで言及したルイスとフッサールの間には、不可能な対象の扱いについての明確な不一致がある[15]。また様相実在

---

[13] 存在のマイノング的二重化の可能な解釈はすべて、存在量化子の解釈および存在汎化の妥当性の正否という問題への回答として整理される (cf. Chrudzimski [2007: ch. 8])。

[14] 「『現実世界』と呼ばれるわれわれの事実的な経験の相関者は、多様な可能世界と非世界 Unwelten の特殊例として得られる〔…〕」(III/1: 100)。「『可能性』の認識が『現実性』の認識に先行しなければならない、という古くからの存在論的学説は、正しく理解され、正しい仕方で用いられるかぎり、偉大な真理であるように私には思われる」(III/1: 178)。同様の発想は、『イデーンⅠ』前後の超越論的観念論についての草稿においてより顕著である(cf. XXXVI: 53–6, 112)。だが、こうした理解を許すのが、『イデーンⅠ』の観念論の優勢的な一側面に過ぎないということにも注意が必要である。可能な体験の総体に対する顕在的体験の優位という、様相実在論的主張とは異なる路線も、別の側面としてすでに『イデーンⅠ』に見いだされるのである(cf. III/1: 101, 104)。この問題に関するわれわれの現時点での見解は、植村[2009b]の結論部で簡単に述べられている。

[15] フッサールの場合、丸い四角のような不可能な対象の存在は、不可能性という定立性格と丸い四角

論をめぐる既成の議論の中には、絶対的意識と可能世界全体の相関関係や、理性的証示可能性と現実の相関関係に対応する問題は見られない。これらの問題こそフッサールの観念論にとって本質的に重要なのだから、フッサール解釈の文脈で様相に関する現代の形而上学を持ち出すことは、理解を助けるための補助的な手段でしかない[16]。

II. また、フッサールの「様相的実在論」を様相の「形而上学」の一種と認めていいのかについても議論の余地がおおいにある。フッサールによれば、「現象学者は存在論的に判断するわけではないのである」(III/1: 359)。こうした主張の根底に考えは、おそらくこういうものだろう。現象学が分析する意識それ自体は、すべての存在者がその中で構成されるものである以上、存在者として扱うことはできない。すると、表面上は形而上学(の一部門としての存在論)的言明の一種であるように見える「意識は絶対的に存在し、超越的対象はそれに依存して存在する」といった現象学的言明は、額面通りに受け止められてはならず、そのかぎりで準形而上学的な言明であることになる[17]。だがフッサールは、現象学を真性の形而上学と見なすような発言を、超越論的観念論の生成期と成熟期に残してもいる[18]。

というノエマ的意味からなるノエマの存在(ただし、意識に相関した存在)として認められなければならない。だが、ルイスの枠組みの中では、こうした不可能対象の存在は認められない。不可能な対象が属する不可能世界の存在を、ルイスは認めないのである(cf. Lewis [1986: 7n])。たしかにルイスは、不可能な個体の存在を認めている。だが、そうした不可能な個体の中には、丸い四角のような対象は数え入れられていない。ルイスは、何かが可能的に存在することを「一つの世界に限定された量化のもとでその全体が存在すること」として定義し、それぞれ異なる可能世界に属する複数の個体から無制限構成原理にもとづいて構成されるメレオロジー的和を、不可能的に存在する個体であると認めているにすぎないのである(cf. Lewis [1986: 210–20])。こうした例からも分かるように、フッサール自身の立場の定式化は、既成の立場との安易な同一視や細部を無視したアナロジーではなく、既成のさまざまな立場を詳細に渡って踏まえた上で、われわれ自身の手でなされなければならない。

[16] とはいえ、限界をわきまえて用いるならば、ルイスとの対比は、フッサール解釈のための補助的手段としてかなり有効だろう。ルイスの様相実在論は、個体同士の可能世界をまたいだ関係を、同一性ではなく対応者 counterpart 関係と見なしている(cf. Lewis [1986: 9–13 *et passim*])。そして、フッサールもまた可能世界をまたいだ個体の関係を、同一性というよりもある種の対応関係として考えているように見える(この机と単に想像された机の同一性を問うことはナンセンスである、という主張を想起しよう)。こういった事情は、フッサールの立場を詳細に定式化する際にルイスの理論のさまざまな細部が補助線として有効性であることを示唆するように思われる。

[17] 絶対的意識は「対象 Objekt ではない」(X: 112)し、そのすべての位相 Phase は「名前を持たない」(X: 75; cf. 371)というフッサールの主張も、「真なる言明のあらゆる主語を、われわれは対象と呼んでいる」(XXX: 31; cf. III/1: 47)という別の主張を踏まえた上で、同じ文脈の中で理解されるべきだろう。その場合、意識についての現象学的な言明に登場する主語は、実はすべて見かけ上の名辞であることになる。すると、そうした名辞を含んだ文全体も意味を持たない見かけ上の文 (Scheinsätze)であり、現象学の言説は真でも偽でもなく、壮大な「ナンセンス Unsinn」である、ということになるだろう。ここで『論理哲学論考』のウィトゲンシュタイン引き合いに出すことは、おそらく的外れではない。よく知られているように、『論考』最終節の目前において、ウィトゲンシュタインはそれまでの叙述をナンセンスと見なしている (cf. Wittgenstein 1922/33: 6.54)。絶対的意識(の位相)は対象ではないというフッサールの主張を、論理空間の全体について語ることはできないというウィトゲンシュタインの主張との対比の中で検討することは、一つの魅力的な研究プログラムであるように思われる。だが、ルイスの場合と同じく、こうした比較研究において重要なのは、細部における相違とその背景である。

[18] 生成期の発言としては 1906–8 年頃の講義・研究草稿(II: 13–4, 32, 58–9; VII: 381–2; XXIV: 139, 178, 191)を、成熟期に関しては『デカルト的省察』第 60 節の冒頭(I: 166)を参照のこと。『イデーン I』にも、志向性という現象学の主要問題が「理性論的・形而上学的問題」に帰着する、という発言が見いだされる(cf. III/1, 188)。なお、インガルデンはフッサールの超越論的観念論を、形而上学的な主張として解釈している(cf. Ingarden [1929: 42; 1964/65: vol. I, 146])。同様の解釈の正当性について、われわ

われわれの今後の課題は、以上のような大局的観点における微妙な事情を踏まえつつ、フッサールの観念論的主張を詳細に定式化し、念入りに検討していくことである。こうした作業においてインガルデンの理論の参照が有効な手段であることは、すでに明らかだろう。しかし、インガルデン自身は単にフッサールの立場を精緻化したかったわけではない。最後にこの点についてごく簡単に考察し、本稿を閉じよう。

4 志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ——終わりに代えて

インガルデンが生涯を捧げた哲学的課題は、世界の存在をめぐる観念論と実在論の論争に、実在論の勝利というしかたで決着をつけることである。われわれは、インガルデンの志向性理論を手がかりにフッサールの超越論的観念論をすこしだけ詳細かつ厳密に定式化した。だが、インガルデンにとっては、フッサールはあくまでも対立陣営に属する観念論者である。それどころか、志向性理論の問題は、世界の存在をめぐる論争における重要な論点を形成する問題と見なされている[19]。

インガルデンの考えでは、われわれが上で取り上げた二側面性という特徴は、純粋志向的対象に見いだされる一方で、世界内に自立的に存在する超越的対象には備わっていない(cf. Ingarden [1964/65: vol. II/1, 211])。そのため、純粋志向的対象は超越的対象と同一ではなく、両者の同一視にもとづいたフッサールの超越論的観念論は、超越に関する主張たりえない。インガルデンの志向性理論は、対象の二重化を認めるのである[20]。

超越的対象の自立的存在を前提したこうした主張は、フッサールの立場からは自然的態度の自明視にしか見えないだろう[21]。そして何よりも、純粋志向的対象の二側面性を受け入れることは、フッサールの立場を揺るがすどころか、その明晰化に役立つのであった。したがって、二側面性に訴えるインガルデンの議論は失敗しているのではないか。

だが、ノエマと超越的対象の同一視を退ける一撃必殺の議論 knock-down argument が存在しないことは、これらの対象の二重化が不可能であることをけっして意味しない。インガルデンの立場を以下のように擁護することが可能だろう。対象の二重化の可能性は、インガルデンとフッサールの志向性理論それぞれの正否がそれに依存するような大問題である。こうした重要な主張は、志向性理論を始める段階で正当化されるとは考えにくい。それはむしろ、二つの理論(および、マイノング主義といったその他の立場)による総力戦の結果を考慮して判定される仮定と見なされるべきではないだろうか。

だが、われわれも第二節で言及したように、フッサールは対象の二重化が維持不可能で

れも別の機会に論じた(cf. 植村[2009b])。

[19] 「〔観念論と実在論の〕論争問題は、レアルな世界ないしその中に見いだされる対象性は、純粋志向的対象なのか、それとも、それとは根本的に異なるものなのか、という問いとしてさらに解釈されうるだろう」(Ingarden 1964/65: vol. II/1, 174)。だが、この問題はインガルデンが取り組む論争のすべてではない。観念論・実在論論争は、存在論的・形而上学的・認識論的問題に三分される(cf. Ingarden [1929; 1964/65: vol. I, 56–8])。こうした区分については、Küng [1975]が詳しく論じている。

[20] ここで取り上げることはできないが、インガルデンによる対象の二重化のもう一つの根拠として、純粋志向的対象には未規定箇所が見いだされるが、超越的対象は完全に規定されている、というものも挙げられる(cf. Ingarden [1964/65: vol. II/1, 204])。

[21] 同様の観点から、Limido-Heulo [2001: 13, 37, 67]は、インガルデンの純粋志向的対象論とフッサールのノエマ論が本当に同じものについての理論なのかという疑念を表明している。

あることを徹底的に論じている。したがって対象の二重化は、仮定として用いることさえできないのではないか。こうしたもっともな疑問は、実はそれほど強力な反論を構成するわけではない。対象の二重化に対するフッサールの批判が、もっぱら志向的対象を作用の実的成素と見なす立場に向けられていたことを思い出そう。この立場に対しては、フッサールの批判は有効かもしれない[22]。だが、インガルデンの純粋志向的対象は、超越的対象の超越とは別の仕方で作用を超越している。純粋志向的対象に含まれるどのモメントも、作用の実的成素ではないのである(cf. Ingarden [1964/65: vol. I, §48])。また、純粋志向的対象は反省的な態度においてはじめてその全体が対象になるとされるため(cf. Ingarden [1931: 125])、インガルデンの理論は、志向的関係の無限後退というフッサールお得意の議論の餌食にならずにすみそうである。もちろん、これらの論点の一つ一つは、より丁寧に検討されなければならない。だが現時点でも、フッサールによる対象の二重化批判もまた一撃必殺の議論ではないと見なすことは許されるだろう[23]。

すると、われわれの暫定的結語はこのようになる。フッサールの擁護者は、インガルデンの挑戦を無視することはできない。両者の対決は、われわれに多くの洞察をもたらすだろう。また、実在論者にとっても、インガルデンの議論はさまざまな発想の宝庫以上の意味合いを持つ。実在論というデフォルトの立場を「反観念論」として動機づけることが一筋縄では行かないということを、われわれはインガルデンの体系の複雑さから学べるのである。世界の存在をめぐる論争は、まだ過去のものではない[24]。

文献

Brandl, J. 2005. "The Immanence Theory of Intentionality," in *Phenomonology and Philosophy of Mind*, ed. by D. W. Smith & A. L. Thomasson, Oxford University Press, 167–82.

Brentano, F. 1874/1924. *Psychologie vom empirischen Stundpunkt*, ed. by O. Kraus, Meiner.

Chrudzimski, A. 1998. *Erkenntnistheorie von Roman Ingarden*, Kluwer.

——. 2001. *Intentionalitätstheorie beim frühen Brentano*, Kluwer.

——. 2002. "Von Brentano zu Ingarden. Die phänomenologische Bedeutungslehre." *Husserl Studies* **18**: 185–208.

---

[22] だが、内在的対象を持ち出すこうした立場さえも、実際にはそう簡単に退けることができるわけではない。Brandl [2005: 168–72]による擁護を参照のこと。また、トヴァルドフスキ流の対象の二重化に対するフッサールの批判の正否については、Hyckerson [2005]が詳しく検討している。

[23] すると、次のように述べるとき、フッサールは自らを取り巻く状況を誤認していることになる。「この観念論は、実在論との弁証論的な論争のうちで戦利品として獲得されるような、遊び半分の議論の産物ではない」(I, 118–9)。また、志向的対象と超越的対象の同一視は、フッサールによればそこからしか超越論的現象学を始めることができないような事柄であるにもかかわらず、探究の最初の段階ではまだ正当化されていない前提であったということにもなるだろう。われわれの議論が正しければ、こうした事情を考慮した、現象学の無前提性についての再検討も必要になるだろう。

[24] 本稿は、第七回フッサール研究会シンポジウム(「フッサールと初期現象学」)における提題「志向性理論から世界の存在をめぐる論争へ：フッサール、ライナッハ、インガルデン」の原稿の主要部分を再構成するという意図にもとづき、完全にあらたに書き下ろされたものである。提題および本稿の草稿にコメントを下さった方々に感謝する。なお、本稿は筆者が日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費(特別研究員奨励費)の支給を受けて行った研究成果の一部である。

——. 2007. *Gegenstandstheorie und Theorie der Intentionalität bei Alexius Meinong*, Springer.

——. 2008. "Truth, Concept Empiricism, and the Realism of Polish Phenomenology." *Polish Journal of Philosophy* **II**: 23–34.

Drummond, J. J. 1990. *Husserlian Intentionality and Non-Foundational Realism*, Kluwer.

Føllesdal, D. 1969. "Husserl's Notion of Noema." *The Journal of Philosophy* **66**: 680–7.

Hyckerson, R. 2005. "Getting the Quasi-Picture: Twardowskian Representationalism and Husserl's Argument Against It." *Journal of the History of Philosophy* **43**: 461–80.

Ingarden, R. 1925. "Essentiale Fragen. Ein Beitrag zum Wesensproblem," in *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologischen Forschung*, vol. VII, ed. by E. Husserl, Niemeyer, 125–304.

——. 1929. "Bemerkungen zum Problem 'Idealismus-Realismus'," reprinted in his *Schriften zur Phänomenologie Edmund Husserls*, ed. by W. Galewicz, *Gesammelte Werke*, vol. V, Niemeyer, 1998, 21–54.

——. 1931. *Das literarische Kunstwerk*, Niemeyer.

——. 1962. "Bemerkungen zum Problem der Begründungen." *Studia Logica* **XIII**: 153–72.

——. 1964/65. *Der Streit um die Existenz der Welt*, vol. I (*Existentialontologie*) & II (*Formalontologie*), Niemeyer.

——. 1975. *On the Motives which led Husserl to Transcendental Idealism*, tr. by A. Hannibalsson, Nijhoff.

Küng, G. 1975. "Zum Lebenswerk von Roman Ingarden. Ontologie, Erkenntnistheorie und Metaphysik," in *Die Münchener Phänomenologie*, ed. by H. Kuhn *et al.*, Nijhoff, 158–73.

Lewis, D. 1986. *On the Plurality of Worlds*, Blackwell.

Limido-Heulot, P. 2001. "Phénoménologie et ontologie chez Roman Ingarden," in R. Ingarden, *Husserl. La controverse Idéalisme-Réalisme (1918-1969)*, ed. & tr. by P. Limido-Heulot, Vrin, 9–145.

Meinong, A. 1905. "Über Gegenstandstheorie," reprented in Meinong 1968–78, vol. II, 481–535.

——. 1915. *Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit*, reprinted as Meinong 1968–78, vol. VI.

——. 1968–78. *Gesamtausgabe*, ed. by R. Haller *et al.*, Akademische Druck- und Verlagsanstalt.

Pfänder, A. 1963/2000. *Logik*, ed. by M. Crespo, 5th ed., C. Winter.

Reinach, A. 1911. "Zur Theorie des negativen Urteils," reprinted in Reinach 1989, 95–140.

——. 1913. "Die apriorischen Grundlagen des bürgelichen Rechtes," reprinted in Reinach 1989, 141–278.

——. 1989. *Sämtliche Werke*, ed. by K. Schuhmann & B. Smith, Philosophia.

Thomasson, A. L. 1999. *Fiction and Metaphysics*, Cambridge University Press.

Twardowski, K. 1894. *Zur Lehre vom Inhalt und Gegenstand der Vorstellungen*, Holder.

Wittgenstein, L. 1922/33. *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kagan Paul.

Zahavi, D. 1992. "Constitution and Ontology. Some Remarks on Husserl's Ontological Position in the *Logical Investigatons*." *Husserl Studies* **9** : 111–24.

植村 玄輝 2007. 「実的なものの現象学の限界——命題のスペチエス説はなぜ放棄されたのか」、『フッサール研究』、第 4/5 号、170–80 頁。

——. 2009a. 「意味はなぜ現象学の問題になるのか——フッサールの『論理学研究』再訪」、『哲学の探究』、第 36 号、73–87 頁。

——. 2009b. 「形而上学における志向性の方法——フッサールの『意味の理論講義』(1908) の意義」、『現象学年報』第二十五号に掲載予定。

——. 20**. 「ライナッハと実在論的現象学の起源」、草稿。